

Title	経済価値説の体系
Sub Title	
Author	武部, 与八郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.8 (1925. 8) ,p.1212(122)- 1241(151)
JaLC DOI	10.14991/001.19250801-0122
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250801-0122">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250801-0122</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

### 經濟價值説の體系

武部 與八郎

(定義)、交換價值とは任意の二商品の交換比例の事である。今任意の二商品を  $x$ 、 $y$  とすれば二商品の交換價值は  $\frac{x}{y}$ 、 $\frac{y}{x}$  の數値を V. E. (Value in Exchange) と置けば

$$\frac{x}{y} = V. E. \dots\dots\dots (1)$$

(定義)、或る量の數値とは此量と同種類の一定量との比を言ふ。従て E. が算出し得られる爲には  $x$ 、 $y$  は同質且つ  $y$  は與へられた一定量でなければならぬ。

一

$x$ 、 $y$  を同質ならしめんが爲に行はれた努力の一。  $x$ 、 $y$  を或る物質的な富に同質化せんとする努力。

$x$  を或る特定の財貨例へば家畜或は織物或は銀或は金の一定量に取つて  $M'$ 、 $y$  を同じく取つて  $M$  とする。又分子と分母とを同じものにて除するも其の値は變らぬ故

$$\frac{x}{y} = \frac{M'}{M} = \frac{\text{或る特定の財貨}}{\text{或る特定の財貨}}$$

$x$ 、 $y$  の數値が算出し得られる爲には  $x$ 、 $y$  が同質なるのみならず  $y$  が與へられた一定量でなければならぬ、今  $M$  を與へられた一定量  $\frac{y}{y}$  に取れば  $M'$  は  $P \cdot \frac{x}{y}$  に於て表明し得られる、 $P$  は任意の數である、然らば

$$\frac{x}{y} = \frac{M'}{M} = \frac{P \cdot \frac{x}{y}}{\frac{y}{y}} \dots\dots\dots (2)$$

(2) の式は一般に價格を意味する。

(定義)、價格とは二商品の交換比の數値である、或は價格とは交換價值の數値である。

證明、(1) より  $\frac{x}{y} = V. E. \dots\dots\dots$  は任意の 商品の交換價值の數値である。(2) より  $\frac{x}{y} = P$ 、 $P$  は價格である (1) 及び (2) より  $V. E. = P$  即ち價格とは任意の二商品の交換價值の數値である。

$$\frac{M'}{M} = P \dots\dots\dots (3)$$

$$\frac{P \cdot \frac{x}{y}}{\frac{y}{y}} = P \dots\dots\dots (4)$$

$M$  は貨幣である、此場合  $M$  は家畜でも織物でも卑金屬貴金屬信用の何れでもあり得る。 $\frac{y}{y}$  は圓或は磅或は弗に制限せられた貨幣である。(2) は (1) に對して  $\frac{y}{y}$  一般的である換言すれば  $\frac{y}{y}$  具體的であ

る、(3)が國際的價格であるに對して(4)は國家的或は個別的價格である。

(定義)

$\frac{P_x}{P_y} = P$  を國家的或は個別的價格と言ふ

$\frac{P_x}{P_y} = \frac{M'_x}{M'_y} = P$  を國際的價格と言ふ

$\frac{P_x}{P_y} = \frac{M'_x}{M'_y} = \frac{x}{y} = P$  を價格一般と言ふ。

(1)及び(2)より

$\frac{P_x}{P_y} = \frac{M'_x}{M'_y} = \frac{x}{y} = P = V_x \cdot E_x \dots \dots \dots (5)$

從て交換價值なる概念と價格一般なる概念とは同じ大サの外延を有する、從て交換價值なる概念は國際的價格及び國家的個別的價格に對してヨリ、一般的なる概念である。

$\frac{x}{y}$  の數値を算出する爲に  $x$ 、 $y$  は或る特定の財貨例へば家畜織物銅鐵銀金の如き、時と場所とに應じて最も普遍性を有する財貨に約元せられなければならぬ。

(定義)、交換價值が算出せられる爲に、任意の二商品が約元せらる可き財貨を貨幣と言ふ。

任意の二商品の數値が算出せられる爲には  $x$ 、 $y$  は同質なるのみならず  $y$  は與へられた一定量でなければならぬ。

(定義)、貨幣の與へられた一定量を貨幣單位と言ふ、貨幣單位が法定せられたる場合はを法貨と言ふ。

言ふ。

定義せられた意味に於ける貨幣は經濟的世界の歴史的發達と共に變遷した、而して此の意味に於ける貨幣に絶對理想的なるもの存せざる事は既に多くの人々に依て證明せられた、物としての貨幣は決して經濟價值の理想的、絶對的なる標準であり得ない事が明かにせられた、然し乍ら我々は、 $x$ 、 $y$  を何等かの貨幣に同質化し又貨幣單位を設定する事に依て交換價值  $\frac{x}{y}$  の數値を近似的に正確に算出し得る事を以て兎に角満足してゐる。

三

$x$ 、 $y$  を同質ならしめんが爲に行はれた努力の二。  $x$ 、 $y$  を人間的なる富に同質化せんとする努力。

任意の二商品  $x$ 、 $y$  の交形の形式は  $x = y$  である。

(イ)  $x$  に費された労働を  $L_1$ 、 $y$  に費された労働を  $L_2$  とすれば  $x = y$  より  $L_1 = L_2$ 。  $x$  に費された労働を  $L_2$ 、 $L_3$ 、 $L_4$ 、 $L_5$ 、 $L_6$ 、 $L_7$ 、 $L_8$ 、 $L_9$ 、 $L_{10}$ 、 $L_{11}$ 、 $L_{12}$ 、 $L_{13}$ 、 $L_{14}$ 、 $L_{15}$ 、 $L_{16}$ 、 $L_{17}$ 、 $L_{18}$ 、 $L_{19}$ 、 $L_{20}$ 、 $L_{21}$ 、 $L_{22}$ 、 $L_{23}$ 、 $L_{24}$ 、 $L_{25}$ 、 $L_{26}$ 、 $L_{27}$ 、 $L_{28}$ 、 $L_{29}$ 、 $L_{30}$ 、 $L_{31}$ 、 $L_{32}$ 、 $L_{33}$ 、 $L_{34}$ 、 $L_{35}$ 、 $L_{36}$ 、 $L_{37}$ 、 $L_{38}$ 、 $L_{39}$ 、 $L_{40}$ 、 $L_{41}$ 、 $L_{42}$ 、 $L_{43}$ 、 $L_{44}$ 、 $L_{45}$ 、 $L_{46}$ 、 $L_{47}$ 、 $L_{48}$ 、 $L_{49}$ 、 $L_{50}$ 、 $L_{51}$ 、 $L_{52}$ 、 $L_{53}$ 、 $L_{54}$ 、 $L_{55}$ 、 $L_{56}$ 、 $L_{57}$ 、 $L_{58}$ 、 $L_{59}$ 、 $L_{60}$ 、 $L_{61}$ 、 $L_{62}$ 、 $L_{63}$ 、 $L_{64}$ 、 $L_{65}$ 、 $L_{66}$ 、 $L_{67}$ 、 $L_{68}$ 、 $L_{69}$ 、 $L_{70}$ 、 $L_{71}$ 、 $L_{72}$ 、 $L_{73}$ 、 $L_{74}$ 、 $L_{75}$ 、 $L_{76}$ 、 $L_{77}$ 、 $L_{78}$ 、 $L_{79}$ 、 $L_{80}$ 、 $L_{81}$ 、 $L_{82}$ 、 $L_{83}$ 、 $L_{84}$ 、 $L_{85}$ 、 $L_{86}$ 、 $L_{87}$ 、 $L_{88}$ 、 $L_{89}$ 、 $L_{90}$ 、 $L_{91}$ 、 $L_{92}$ 、 $L_{93}$ 、 $L_{94}$ 、 $L_{95}$ 、 $L_{96}$ 、 $L_{97}$ 、 $L_{98}$ 、 $L_{99}$ 、 $L_{100}$ 、 $L_{101}$ 、 $L_{102}$ 、 $L_{103}$ 、 $L_{104}$ 、 $L_{105}$ 、 $L_{106}$ 、 $L_{107}$ 、 $L_{108}$ 、 $L_{109}$ 、 $L_{110}$ 、 $L_{111}$ 、 $L_{112}$ 、 $L_{113}$ 、 $L_{114}$ 、 $L_{115}$ 、 $L_{116}$ 、 $L_{117}$ 、 $L_{118}$ 、 $L_{119}$ 、 $L_{120}$ 、 $L_{121}$ 、 $L_{122}$ 、 $L_{123}$ 、 $L_{124}$ 、 $L_{125}$ 、 $L_{126}$ 、 $L_{127}$ 、 $L_{128}$ 、 $L_{129}$ 、 $L_{130}$ 、 $L_{131}$ 、 $L_{132}$ 、 $L_{133}$ 、 $L_{134}$ 、 $L_{135}$ 、 $L_{136}$ 、 $L_{137}$ 、 $L_{138}$ 、 $L_{139}$ 、 $L_{140}$ 、 $L_{141}$ 、 $L_{142}$ 、 $L_{143}$ 、 $L_{144}$ 、 $L_{145}$ 、 $L_{146}$ 、 $L_{147}$ 、 $L_{148}$ 、 $L_{149}$ 、 $L_{150}$ 、 $L_{151}$ 、 $L_{152}$ 、 $L_{153}$ 、 $L_{154}$ 、 $L_{155}$ 、 $L_{156}$ 、 $L_{157}$ 、 $L_{158}$ 、 $L_{159}$ 、 $L_{160}$ 、 $L_{161}$ 、 $L_{162}$ 、 $L_{163}$ 、 $L_{164}$ 、 $L_{165}$ 、 $L_{166}$ 、 $L_{167}$ 、 $L_{168}$ 、 $L_{169}$ 、 $L_{170}$ 、 $L_{171}$ 、 $L_{172}$ 、 $L_{173}$ 、 $L_{174}$ 、 $L_{175}$ 、 $L_{176}$ 、 $L_{177}$ 、 $L_{178}$ 、 $L_{179}$ 、 $L_{180}$ 、 $L_{181}$ 、 $L_{182}$ 、 $L_{183}$ 、 $L_{184}$ 、 $L_{185}$ 、 $L_{186}$ 、 $L_{187}$ 、 $L_{188}$ 、 $L_{189}$ 、 $L_{190}$ 、 $L_{191}$ 、 $L_{192}$ 、 $L_{193}$ 、 $L_{194}$ 、 $L_{195}$ 、 $L_{196}$ 、 $L_{197}$ 、 $L_{198}$ 、 $L_{199}$ 、 $L_{200}$ 、 $L_{201}$ 、 $L_{202}$ 、 $L_{203}$ 、 $L_{204}$ 、 $L_{205}$ 、 $L_{206}$ 、 $L_{207}$ 、 $L_{208}$ 、 $L_{209}$ 、 $L_{210}$ 、 $L_{211}$ 、 $L_{212}$ 、 $L_{213}$ 、 $L_{214}$ 、 $L_{215}$ 、 $L_{216}$ 、 $L_{217}$ 、 $L_{218}$ 、 $L_{219}$ 、 $L_{220}$ 、 $L_{221}$ 、 $L_{222}$ 、 $L_{223}$ 、 $L_{224}$ 、 $L_{225}$ 、 $L_{226}$ 、 $L_{227}$ 、 $L_{228}$ 、 $L_{229}$ 、 $L_{230}$ 、 $L_{231}$ 、 $L_{232}$ 、 $L_{233}$ 、 $L_{234}$ 、 $L_{235}$ 、 $L_{236}$ 、 $L_{237}$ 、 $L_{238}$ 、 $L_{239}$ 、 $L_{240}$ 、 $L_{241}$ 、 $L_{242}$ 、 $L_{243}$ 、 $L_{244}$ 、 $L_{245}$ 、 $L_{246}$ 、 $L_{247}$ 、 $L_{248}$ 、 $L_{249}$ 、 $L_{250}$ 、 $L_{251}$ 、 $L_{252}$ 、 $L_{253}$ 、 $L_{254}$ 、 $L_{255}$ 、 $L_{256}$ 、 $L_{257}$ 、 $L_{258}$ 、 $L_{259}$ 、 $L_{260}$ 、 $L_{261}$ 、 $L_{262}$ 、 $L_{263}$ 、 $L_{264}$ 、 $L_{265}$ 、 $L_{266}$ 、 $L_{267}$ 、 $L_{268}$ 、 $L_{269}$ 、 $L_{270}$ 、 $L_{271}$ 、 $L_{272}$ 、 $L_{273}$ 、 $L_{274}$ 、 $L_{275}$ 、 $L_{276}$ 、 $L_{277}$ 、 $L_{278}$ 、 $L_{279}$ 、 $L_{280}$ 、 $L_{281}$ 、 $L_{282}$ 、 $L_{283}$ 、 $L_{284}$ 、 $L_{285}$ 、 $L_{286}$ 、 $L_{287}$ 、 $L_{288}$ 、 $L_{289}$ 、 $L_{290}$ 、 $L_{291}$ 、 $L_{292}$ 、 $L_{293}$ 、 $L_{294}$ 、 $L_{295}$ 、 $L_{296}$ 、 $L_{297}$ 、 $L_{298}$ 、 $L_{299}$ 、 $L_{300}$ 、 $L_{301}$ 、 $L_{302}$ 、 $L_{303}$ 、 $L_{304}$ 、 $L_{305}$ 、 $L_{306}$ 、 $L_{307}$ 、 $L_{308}$ 、 $L_{309}$ 、 $L_{310}$ 、 $L_{311}$ 、 $L_{312}$ 、 $L_{313}$ 、 $L_{314}$ 、 $L_{315}$ 、 $L_{316}$ 、 $L_{317}$ 、 $L_{318}$ 、 $L_{319}$ 、 $L_{320}$ 、 $L_{321}$ 、 $L_{322}$ 、 $L_{323}$ 、 $L_{324}$ 、 $L_{325}$ 、 $L_{326}$ 、 $L_{327}$ 、 $L_{328}$ 、 $L_{329}$ 、 $L_{330}$ 、 $L_{331}$ 、 $L_{332}$ 、 $L_{333}$ 、 $L_{334}$ 、 $L_{335}$ 、 $L_{336}$ 、 $L_{337}$ 、 $L_{338}$ 、 $L_{339}$ 、 $L_{340}$ 、 $L_{341}$ 、 $L_{342}$ 、 $L_{343}$ 、 $L_{344}$ 、 $L_{345}$ 、 $L_{346}$ 、 $L_{347}$ 、 $L_{348}$ 、 $L_{349}$ 、 $L_{350}$ 、 $L_{351}$ 、 $L_{352}$ 、 $L_{353}$ 、 $L_{354}$ 、 $L_{355}$ 、 $L_{356}$ 、 $L_{357}$ 、 $L_{358}$ 、 $L_{359}$ 、 $L_{360}$ 、 $L_{361}$ 、 $L_{362}$ 、 $L_{363}$ 、 $L_{364}$ 、 $L_{365}$ 、 $L_{366}$ 、 $L_{367}$ 、 $L_{368}$ 、 $L_{369}$ 、 $L_{370}$ 、 $L_{371}$ 、 $L_{372}$ 、 $L_{373}$ 、 $L_{374}$ 、 $L_{375}$ 、 $L_{376}$ 、 $L_{377}$ 、 $L_{378}$ 、 $L_{379}$ 、 $L_{380}$ 、 $L_{381}$ 、 $L_{382}$ 、 $L_{383}$ 、 $L_{384}$ 、 $L_{385}$ 、 $L_{386}$ 、 $L_{387}$ 、 $L_{388}$ 、 $L_{389}$ 、 $L_{390}$ 、 $L_{391}$ 、 $L_{392}$ 、 $L_{393}$ 、 $L_{394}$ 、 $L_{395}$ 、 $L_{396}$ 、 $L_{397}$ 、 $L_{398}$ 、 $L_{399}$ 、 $L_{400}$ 、 $L_{401}$ 、 $L_{402}$ 、 $L_{403}$ 、 $L_{404}$ 、 $L_{405}$ 、 $L_{406}$ 、 $L_{407}$ 、 $L_{408}$ 、 $L_{409}$ 、 $L_{410}$ 、 $L_{411}$ 、 $L_{412}$ 、 $L_{413}$ 、 $L_{414}$ 、 $L_{415}$ 、 $L_{416}$ 、 $L_{417}$ 、 $L_{418}$ 、 $L_{419}$ 、 $L_{420}$ 、 $L_{421}$ 、 $L_{422}$ 、 $L_{423}$ 、 $L_{424}$ 、 $L_{425}$ 、 $L_{426}$ 、 $L_{427}$ 、 $L_{428}$ 、 $L_{429}$ 、 $L_{430}$ 、 $L_{431}$ 、 $L_{432}$ 、 $L_{433}$ 、 $L_{434}$ 、 $L_{435}$ 、 $L_{436}$ 、 $L_{437}$ 、 $L_{438}$ 、 $L_{439}$ 、 $L_{440}$ 、 $L_{441}$ 、 $L_{442}$ 、 $L_{443}$ 、 $L_{444}$ 、 $L_{445}$ 、 $L_{446}$ 、 $L_{447}$ 、 $L_{448}$ 、 $L_{449}$ 、 $L_{450}$ 、 $L_{451}$ 、 $L_{452}$ 、 $L_{453}$ 、 $L_{454}$ 、 $L_{455}$ 、 $L_{456}$ 、 $L_{457}$ 、 $L_{458}$ 、 $L_{459}$ 、 $L_{460}$ 、 $L_{461}$ 、 $L_{462}$ 、 $L_{463}$ 、 $L_{464}$ 、 $L_{465}$ 、 $L_{466}$ 、 $L_{467}$ 、 $L_{468}$ 、 $L_{469}$ 、 $L_{470}$ 、 $L_{471}$ 、 $L_{472}$ 、 $L_{473}$ 、 $L_{474}$ 、 $L_{475}$ 、 $L_{476}$ 、 $L_{477}$ 、 $L_{478}$ 、 $L_{479}$ 、 $L_{480}$ 、 $L_{481}$ 、 $L_{482}$ 、 $L_{483}$ 、 $L_{484}$ 、 $L_{485}$ 、 $L_{486}$ 、 $L_{487}$ 、 $L_{488}$ 、 $L_{489}$ 、 $L_{490}$ 、 $L_{491}$ 、 $L_{492}$ 、 $L_{493}$ 、 $L_{494}$ 、 $L_{495}$ 、 $L_{496}$ 、 $L_{497}$ 、 $L_{498}$ 、 $L_{499}$ 、 $L_{500}$ 、 $L_{501}$ 、 $L_{502}$ 、 $L_{503}$ 、 $L_{504}$ 、 $L_{505}$ 、 $L_{506}$ 、 $L_{507}$ 、 $L_{508}$ 、 $L_{509}$ 、 $L_{510}$ 、 $L_{511}$ 、 $L_{512}$ 、 $L_{513}$ 、 $L_{514}$ 、 $L_{515}$ 、 $L_{516}$ 、 $L_{517}$ 、 $L_{518}$ 、 $L_{519}$ 、 $L_{520}$ 、 $L_{521}$ 、 $L_{522}$ 、 $L_{523}$ 、 $L_{524}$ 、 $L_{525}$ 、 $L_{526}$ 、 $L_{527}$ 、 $L_{528}$ 、 $L_{529}$ 、 $L_{530}$ 、 $L_{531}$ 、 $L_{532}$ 、 $L_{533}$ 、 $L_{534}$ 、 $L_{535}$ 、 $L_{536}$ 、 $L_{537}$ 、 $L_{538}$ 、 $L_{539}$ 、 $L_{540}$ 、 $L_{541}$ 、 $L_{542}$ 、 $L_{543}$ 、 $L_{544}$ 、 $L_{545}$ 、 $L_{546}$ 、 $L_{547}$ 、 $L_{548}$ 、 $L_{549}$ 、 $L_{550}$ 、 $L_{551}$ 、 $L_{552}$ 、 $L_{553}$ 、 $L_{554}$ 、 $L_{555}$ 、 $L_{556}$ 、 $L_{557}$ 、 $L_{558}$ 、 $L_{559}$ 、 $L_{560}$ 、 $L_{561}$ 、 $L_{562}$ 、 $L_{563}$ 、 $L_{564}$ 、 $L_{565}$ 、 $L_{566}$ 、 $L_{567}$ 、 $L_{568}$ 、 $L_{569}$ 、 $L_{570}$ 、 $L_{571}$ 、 $L_{572}$ 、 $L_{573}$ 、 $L_{574}$ 、 $L_{575}$ 、 $L_{576}$ 、 $L_{577}$ 、 $L_{578}$ 、 $L_{579}$ 、 $L_{580}$ 、 $L_{581}$ 、 $L_{582}$ 、 $L_{583}$ 、 $L_{584}$ 、 $L_{585}$ 、 $L_{586}$ 、 $L_{587}$ 、 $L_{588}$ 、 $L_{589}$ 、 $L_{590}$ 、 $L_{591}$ 、 $L_{592}$ 、 $L_{593}$ 、 $L_{594}$ 、 $L_{595}$ 、 $L_{596}$ 、 $L_{597}$ 、 $L_{598}$ 、 $L_{599}$ 、 $L_{600}$ 、 $L_{601}$ 、 $L_{602}$ 、 $L_{603}$ 、 $L_{604}$ 、 $L_{605}$ 、 $L_{606}$ 、 $L_{607}$ 、 $L_{608}$ 、 $L_{609}$ 、 $L_{610}$ 、 $L_{611}$ 、 $L_{612}$ 、 $L_{613}$ 、 $L_{614}$ 、 $L_{615}$ 、 $L_{616}$ 、 $L_{617}$ 、 $L_{618}$ 、 $L_{619}$ 、 $L_{620}$ 、 $L_{621}$ 、 $L_{622}$ 、 $L_{623}$ 、 $L_{624}$ 、 $L_{625}$ 、 $L_{626}$ 、 $L_{627}$ 、 $L_{628}$ 、 $L_{629}$ 、 $L_{630}$ 、 $L_{631}$ 、 $L_{632}$ 、 $L_{633}$ 、 $L_{634}$ 、 $L_{635}$ 、 $L_{636}$ 、 $L_{637}$ 、 $L_{638}$ 、 $L_{639}$ 、 $L_{640}$ 、 $L_{641}$ 、 $L_{642}$ 、 $L_{643}$ 、 $L_{644}$ 、 $L_{645}$ 、 $L_{646}$ 、 $L_{647}$ 、 $L_{648}$ 、 $L_{649}$ 、 $L_{650}$ 、 $L_{651}$ 、 $L_{652}$ 、 $L_{653}$ 、 $L_{654}$ 、 $L_{655}$ 、 $L_{656}$ 、 $L_{657}$ 、 $L_{658}$ 、 $L_{659}$ 、 $L_{660}$ 、 $L_{661}$ 、 $L_{662}$ 、 $L_{663}$ 、 $L_{664}$ 、 $L_{665}$ 、 $L_{666}$ 、 $L_{667}$ 、 $L_{668}$ 、 $L_{669}$ 、 $L_{670}$ 、 $L_{671}$ 、 $L_{672}$ 、 $L_{673}$ 、 $L_{674}$ 、 $L_{675}$ 、 $L_{676}$ 、 $L_{677}$ 、 $L_{678}$ 、 $L_{679}$ 、 $L_{680}$ 、 $L_{681}$ 、 $L_{682}$ 、 $L_{683}$ 、 $L_{684}$ 、 $L_{685}$ 、 $L_{686}$ 、 $L_{687}$ 、 $L_{688}$ 、 $L_{689}$ 、 $L_{690}$ 、 $L_{691}$ 、 $L_{692}$ 、 $L_{693}$ 、 $L_{694}$ 、 $L_{695}$ 、 $L_{696}$ 、 $L_{697}$ 、 $L_{698}$ 、 $L_{699}$ 、 $L_{700}$ 、 $L_{701}$ 、 $L_{702}$ 、 $L_{703}$ 、 $L_{704}$ 、 $L_{705}$ 、 $L_{706}$ 、 $L_{707}$ 、 $L_{708}$ 、 $L_{709}$ 、 $L_{710}$ 、 $L_{711}$ 、 $L_{712}$ 、 $L_{713}$ 、 $L_{714}$ 、 $L_{715}$ 、 $L_{716}$ 、 $L_{717}$ 、 $L_{718}$ 、 $L_{719}$ 、 $L_{720}$ 、 $L_{721}$ 、 $L_{722}$ 、 $L_{723}$ 、 $L_{724}$ 、 $L_{725}$ 、 $L_{726}$ 、 $L_{727}$ 、 $L_{728}$ 、 $L_{729}$ 、 $L_{730}$ 、 $L_{731}$ 、 $L_{732}$ 、 $L_{733}$ 、 $L_{734}$ 、 $L_{735}$ 、 $L_{736}$ 、 $L_{737}$ 、 $L_{738}$ 、 $L_{739}$ 、 $L_{740}$ 、 $L_{741}$ 、 $L_{742}$ 、 $L_{743}$ 、 $L_{744}$ 、 $L_{745}$ 、 $L_{746}$ 、 $L_{747}$ 、 $L_{748}$ 、 $L_{749}$ 、 $L_{750}$ 、 $L_{751}$ 、 $L_{752}$ 、 $L_{753}$ 、 $L_{754}$ 、 $L_{755}$ 、 $L_{756}$ 、 $L_{757}$ 、 $L_{758}$ 、 $L_{759}$ 、 $L_{760}$ 、 $L_{761}$ 、 $L_{762}$ 、 $L_{763}$ 、 $L_{764}$ 、 $L_{765}$ 、 $L_{766}$ 、 $L_{767}$ 、 $L_{768}$ 、 $L_{769}$ 、 $L_{770}$ 、 $L_{771}$ 、 $L_{772}$ 、 $L_{773}$ 、 $L_{774}$ 、 $L_{775}$ 、 $L_{776}$ 、 $L_{777}$ 、 $L_{778}$ 、 $L_{779}$ 、 $L_{780}$ 、 $L_{781}$ 、 $L_{782}$ 、 $L_{783}$ 、 $L_{784}$ 、 $L_{785}$ 、 $L_{786}$ 、 $L_{787}$ 、 $L_{788}$ 、 $L_{789}$ 、 $L_{790}$ 、 $L_{791}$ 、 $L_{792}$ 、 $L_{793}$ 、 $L_{794}$ 、 $L_{795}$ 、 $L_{796}$ 、 $L_{797}$ 、 $L_{798}$ 、 $L_{799}$ 、 $L_{800}$ 、 $L_{801}$ 、 $L_{802}$ 、 $L_{803}$ 、 $L_{804}$ 、 $L_{805}$ 、 $L_{806}$ 、 $L_{807}$ 、 $L_{808}$ 、 $L_{809}$ 、 $L_{810}$ 、 $L_{811}$ 、 $L_{812}$ 、 $L_{813}$ 、 $L_{814}$ 、 $L_{815}$ 、 $L_{816}$ 、 $L_{817}$ 、 $L_{818}$ 、 $L_{819}$ 、 $L_{820}$ 、 $L_{821}$ 、 $L_{822}$ 、 $L_{823}$ 、 $L_{824}$ 、 $L_{825}$ 、 $L_{826}$ 、 $L_{827}$ 、 $L_{828}$ 、 $L_{829}$ 、 $L_{830}$ 、 $L_{831}$ 、 $L_{832}$ 、 $L_{833}$ 、 $L_{834}$ 、 $L_{835}$ 、 $L_{836}$ 、 $L_{837}$ 、 $L_{838}$ 、 $L_{839}$ 、 $L_{840}$ 、 $L_{841}$ 、 $L_{842}$ 、 $L_{843}$ 、 $L_{844}$ 、 $L_{845}$ 、 $L_{846}$ 、 $L_{847}$ 、 $L_{848}$ 、 $L_{849}$ 、 $L_{850}$ 、 $L_{851}$ 、 $L_{852}$ 、 $L_{853}$ 、 $L_{854}$ 、 $L_{855}$ 、 $L_{856}$ 、 $L_{857}$ 、 $L_{858}$ 、 $L_{859}$ 、 $L_{860}$ 、 $L_{861}$ 、 $L_{862}$ 、 $L_{863}$ 、 $L_{864}$ 、 $L_{865}$ 、 $L_{866}$ 、 $L_{867}$ 、 $L_{868}$ 、 $L_{869}$ 、 $L_{870}$ 、 $L_{871}$ 、 $L_{872}$ 、 $L_{873}$ 、 $L_{874}$ 、 $L_{875}$ 、 $L_{876}$ 、 $L_{877}$ 、 $L_{878}$ 、 $L_{879}$ 、 $L_{880}$ 、 $L_{881}$ 、 $L_{882}$ 、 $L_{883}$ 、 $L_{884}$ 、 $L_{885}$ 、 $L_{886}$ 、 $L_{887}$ 、 $L_{888}$ 、 $L_{889}$ 、 $L_{890}$ 、 $L_{891}$ 、 $L_{892}$ 、 $L_{893}$ 、 $L_{894}$ 、 $L_{895}$ 、 $L_{896}$ 、 $L_{897}$ 、 $L_{898}$ 、 $L_{899}$ 、 $L_{900}$ 、 $L_{901}$ 、 $L_{902}$ 、 $L_{903}$ 、 $L_{904}$ 、 $L_{905}$ 、 $L_{906}$ 、 $L_{907}$ 、 $L_{908}$ 、 $L_{909}$ 、 $L_{910}$ 、 $L_{911}$ 、 $L_{912}$ 、 $L_{913}$ 、 $L_{914}$ 、 $L_{915}$ 、 $L_{916}$ 、 $L_{917}$ 、 $L_{918}$ 、 $L_{919}$ 、 $L_{920}$ 、 $L_{921}$ 、 $L_{922}$ 、 $L_{923}$ 、 $L_{924}$ 、 $L_{925}$ 、 $L_{926}$ 、 $L_{927}$ 、 $L_{928}$ 、 $L_{929}$ 、 $L_{930}$ 、 $L_{931}$ 、 $L_{932}$ 、 $L_{933}$ 、 $L_{934}$ 、 $L_{935}$ 、 $L_{936}$ 、 $L_{937}$ 、 $L_{938}$ 、 $L_{939}$ 、 $L_{940}$ 、 $L_{941}$ 、 $L_{942}$ 、 $L_{943}$ 、 $L_{944}$ 、 $L_{945}$ 、 $L_{946}$ 、 $L_{947}$ 、 $L_{948}$ 、 $L_{949}$ 、 $L_{950}$ 、 $L_{951}$ 、 $L_{952}$ 、 $L_{953}$ 、 $L_{954}$ 、 $L_{955}$ 、 $L_{956}$ 、 $L_{957}$ 、 $L_{958}$ 、 $L_{959}$ 、 $L_{960}$ 、 $L_{961}$ 、 $L_{962}$ 、 $L_{963}$ 、 $L_{964}$ 、 $L_{965}$ 、 $L_{966}$ 、 $L_{967}$ 、 $L_{968}$ 、 $L_{969}$ 、 $L_{970}$ 、 $L_{971}$ 、 $L_{972}$ 、 $L_{973}$ 、 $L_{974}$ 、 $L_{975}$ 、 $L_{976}$ 、 $L_{977}$ 、 $L_{978}$ 、 $L_{979}$ 、 $L_{980}$ 、 $L_{981}$ 、 $L_{982}$ 、 $L_{983}$ 、 $L_{984}$ 、 $L_{985}$ 、 $L_{986}$ 、 $L_{987}$ 、 $L_{988}$ 、 $L_{989}$ 、 $L_{990}$ 、 $L_{991}$ 、 $L_{992}$ 、 $L_{993}$ 、 $L_{994}$ 、 $L_{995}$ 、 $L_{996}$ 、 $L_{997}$ 、 $L_{998}$ 、 $L_{999}$ 、 $L_{1000}$ 、 $L_{1001}$ 、 $L_{1002}$ 、 $L_{1$



前提とする。經濟科學の爲には經濟的に生きねばならぬ事經濟的に常に何者かを創造しなければならぬ事が前提せられる。此經濟學に於ける「ねばならぬ」を經濟的當爲或は經濟的文化價值と言ふ。而して此の經濟的當爲を可能ならしむる經濟的に生きて居ると言ふ事の直接なる經驗を經濟的生命の直觀或は體驗と言ふ。現在としての現在に於て體驗せられるものを經濟的生命の衝動力と言ふ。我々は經濟的文化價值に従て(一)經濟的に生きねばならぬ(二)經濟的に常に何者かを創造しなければならぬ。經濟的に生きねばならぬ爲に富が存在し、經濟的に常に何者かを創造しなければならぬ爲に經濟價值が存在する。經濟價值は經濟的に常に何者かを創造するが故に價值である。經濟學に於ける創造は富の創造である、從て常に何等かの富を創造するものこそ經濟價值を有するものである。勞働と效用とは常に新たなる富の存在を可能ならしむると考へられる限りに於て經濟價值である。

認識の世界に於ける創造は凡て「主觀に依る客觀の認識」による。愛による。主觀と客觀とは認識界に於ける創造の二つの根本的要素である、認識界の創造の爲に豫定せられた一者と他者、アダムとイヴである。認識界の創造は凡て「主觀に依る客觀の認識」に相似なる型に於て行はれる。經濟的富の創造は認識の此の根本的特性に從て主觀的要素なる效用と客觀的要素なる勞働とに依て行はれる。富の創造は人間の物的經濟的政治的社會的倫理的美的歴史的關係である。然し此等の諸關係は凡て富の創造の主觀的要素效用と客觀的要素勞働とに夫々漏るる事なく内含せられてゐる。其はアダムとイヴの子孫は人間の物的經濟的政治的社會的倫理的美的歴史的關係なる複雑な關係を構成するが結局に於て此等凡ての關係は唯二つの根本的要素アダムとイヴとに約元せられ得るのと同じである。今經濟的認識の主觀を貨幣、對象一般を價格と呼ぶならば價值とは貨幣及び價格の子孫の事である或は價值とは價格の子孫の事である。勞働價值は男系子孫效用價值は女系子孫である。

## 四

$x$ 、 $y$ を同質ならしめんが爲に行はれた努力の三。 $x$ 、 $y$ を觀念的なるものに同質化せんとする努力。經濟的認識の對象一般に同質化せんとする努力。任意の二商品の交換價值 $x$ 、 $y$ の數値を算出する爲には、 $x$ 、 $y$ は同質でなければならぬ。 $x$ 、 $y$ を同質ならしむる努力は經濟學的に二つの方向に向つた。一ツは物としての富に同質化する方向に向ひ、一ツは人としての富に同質化する方向に向つた。前者が實證的であるに對して後者は價值的、前者が貨幣論を起したに對して後者は價值論を發生せしめた。經濟哲學的には、 $x$ 、 $y$ に同質なるものは、物としての貨幣、人間の價值に對して更にヨリ具體的なる、價格一般に求められる。經濟學の認識の對象一般に求められる。

價格は現實に成立する、一定時一定點に於ては一物に就て一價である。任意の價格例へば五圓を取れ。一定時一定點に於ける五圓の價格は(一)綿絲の絹絲の鐵の銅の、種々なる生活必需品奢侈品の五圓の價格であり得る(二)勞働價值に依る交換價值の形式  $L_I$  の數値或は效用價值に依る交換價值の形式  $U^u$  の數値であり得る。

今一定時一定點に於て成立する任意の價格を  $P$ 、 $P$  價格の勞働に依る交換價值の一般的形式を  $L_I$ 、效用に依る交換價值の一般的形式を  $U^u$ 。  $P$  の綿絲の勞働交換價值の形式を  $L_I$ 、 $P$  の絹

絲の勞働交換價値の形式を $L_1, L_2, \dots$ 以下同じ。Pの綿絲の效用交換價値の形式を $U_1, U_2, U_3, \dots$ 以下同じ。とすれば

$$\frac{L}{1} = \frac{L_1}{1} = \frac{L_2}{1} = \frac{L_3}{1} \dots \dots \dots \text{以下同じ} \dots \dots \dots = P \dots \dots \dots (8)$$

$$\frac{U}{u} = \frac{U_1}{u_1} = \frac{U_2}{u_2} = \frac{U_3}{u_3} \dots \dots \dots \text{以下同じ} \dots \dots \dots = P \dots \dots \dots (9)$$

一定時一定點に於ける任意の價格Pは、無限に多數なる、勞働に依る、或は效用に依る交換價値の形式を有する有し得る。

$$(8) \text{より} \quad \frac{L}{1} = \frac{L_1 + L_2 + L_3 + \dots \text{以下同じ}}{1 + 1 + 1 + \dots \text{以下同じ}} = P \dots \dots \dots (10)$$

$$(9) \text{より} \quad \frac{U}{u} = \frac{U_1 + U_2 + U_3 + \dots \text{以下同じ}}{u_1 + u_2 + u_3 + \dots \text{以下同じ}} = P \dots \dots \dots (11)$$

我々はPを決定する $L_1, L_2, L_3, \dots$ 。及び $u_1, u_2, u_3, \dots$ 。を數へ擧げ盡す事は出來ぬ、然、乍ら、一定時一定點に於て成立する任意の價格Pの諸交換價値の二ツの組即ち $(L_1, L_2, L_3, \dots)$ 、 $(u_1, u_2, u_3, \dots)$ が、 $L$ と $U$ とに約元せられ得る事を推定する(10)及び(11)参照)。「以下同じ」を了解するものと推定する。

交換價値一般( $L$ 及び $U$ )に屬する特性にして且つ個々の商品の交換價値( $L_1, L_2, L_3, \dots$ 、 $U_1, U_2, U_3, \dots$ )にも屬する特性は凡て、全ての價格(P)に屬する事を推定する、最後の推定は交換價値歸納の原理として役立つであらう。

一定時一定點に於て成立する任意の價格Pが内含する諸々の交換價値は交換價値歸納の原理に依りて $L$ と $U$ とに歸納せられた

$$(10) \text{より} \quad \frac{L}{1} = P \dots \dots \dots (12)$$

$$(11) \text{より} \quad \frac{U}{u} = P \dots \dots \dots (13)$$

$$(12) \text{及} (13) \text{より} \quad P = \frac{L}{1} = \frac{L}{u} \dots \dots \dots (14)$$

Pは $L$ 及び $U$ に共通する、Pは兩者に對してヨリ具體的なる存在である。感覺と單純感情とから個々の心理現象が創造的に綜合せられる様に $L$ と $U$ とから個々の價格が創造的に綜合せられる。此創造的綜合の原理は經濟の本則と稱せらるる所のものである。生産者の立場からの交換價値と消費者の立場からの交換價値とは、其雙方に「最小の勞費を以て最大の效果を得んとする」經濟の本則が作用する場合、價格に創造的に綜合せられる。 $L$ 及び $U$ の數値は算出し得なくとも、經濟の存する所常に價格は成立する 現實なる二商品の交換がある。

$$(\dots \dots 1, 2, 3, \dots \dots n, n+1, \dots \dots) \text{圓}$$

我々は個々の價格の組を價格一般と呼び得るであらう。

個々の商品は凡て勞働或は效用に約元せられる。個々の商品の勞働に依る或は效用に依る交換價値は交換價値歸納の原理に依りて勞働に依る或は效用に依る交換價値一般に約元せられる。勞働に依

る交換價值一般と效用に依る交換價值一般とは經濟の本則或は創造的綜合の原理に依て任意の一價格に約元せられる。任意の一價格は凡て價格一般に約元せられる。凡ての價格を有するものは富である、價格を有せざるものは經濟學上富でない。然らば價格一般は經濟學の認識の對象一般に外ならぬ。凡ての經濟現象が經濟學の認識の對象一般に於て完全に同質である事は疑ひ得ない事であらう。貨幣は家畜織物銅鐵銀金等々であり得る然るに此場合其は純粹に同質でない。價值は労働或は效用であり得る然るに此場合其は純粹に同質でない。凡ての貨幣價值を有するものに共通であり且つは又一者労働と他者效用との統一者である價格一般は經濟學の認識の對象一般として任意の二商品の純粹なる同質的媒介者である。任意の二商品  $x$ 、 $y$  の同質化は經濟學の對象一般換言すれば價格一般に於て窮極する。

五

$x$ 、 $y$  を同質ならぬめんが爲に行はれた努力の四。  $x$ 、 $y$  を超越論理的なる經濟的生命の衝動力に於て同質ならしめんとする努力。此部分の努力は經濟的認識の問題を取扱ふ。

實際的經濟學者の爲には〇圓〇錢の價值を有するものは價格を有せざるものとして其研究の對象から除外せられる、彼等の爲には價格の系列は例へば1から始まる

$$\begin{aligned} & (\dots 1, 2, 3, \dots n, n+1, \dots) \text{圓} \\ & (0, 1, 2, 3, \dots n, n+1, \dots) \text{圓} \end{aligned}$$

然らば〇圓〇錢とは何ぞ。

交換價值を中心として見る時、富( $G$ )は労働( $L$ )の函数である  $G = \phi L$ 。富( $G$ )は效用( $U$ )の函数である  $G = \psi U$ 。労働と效用とは價格に約元し得られる而して富( $W$ )は價格( $P$ )の函数である  $W = F(P)$ 。富( $G$ )は貨幣( $M$ )の函数である  $G = f(M)$ 。然るに貨幣は凡て價格を有するものである、従つて  $G = f(M)$  は又  $W = F(P)$  に約元し得られる。經濟學の認識の對象一般は價格一般である、従つて

$$W = F(P) \dots \dots \dots (15)$$

は經濟學に於ける命題的函数である。  $\phi L$  に於ては  $L$  が労働である事が豫定せられて居る従て「労働が費されたものは富である」は一命題である。  $\psi U$  に於ては  $U$  が效用である事が豫定せられて居る従て「效用を有するものは富である」は一命題である。  $F(P)$  に於て  $M$  が貨幣である事は豫定せられて居る従て「貨幣價值を有するものは富である」は一命題である。  $F(P)$  に於て  $P$  は價格一般である、 $P$  に  $L$ 、 $U$ 、 $M$  の何れを代入しても  $W = F(P)$  は成立する。従つて  $W = F(P)$  は  $G = \phi L$ 、 $G = \psi U$ 、 $G = f(M)$  の諸命題に對して命題的函数である。命題的函数とは其の諸値が諸命題なる一函数である。經濟學に於ける命題的函数  $W = F(P)$  は經濟學上に於ける凡ての諸命題を満足せしめる。

命題的函数(15)に於て、 $a$  が正當の種類の對象であるならば、 $F(P)$  は  $a$  が如何様に選ばれ様とも真である、例へば  $a$  が〇圓〇錢の價格を有する富(空氣や水や人の才能の如き或は火星に於ける食物、衣服、住家の如き)である場合にも空氣や水や人の才能や火星人の食物、衣服、住家が何等かの意味に於て「富である」と世間の人々に認められて居る限り此等のものは凡て經濟學の認識の對象たり得る。

價格の系列は(…1, 2, 3, …)圓であると考へられて居る。價格の全系列は經濟學の認識對象一般を表明する。此價格の全系列の始めに於て豫定せられなければならぬものは○圓○錢である。對象一般に對して豫定せられるものは主觀一般である、然らば○圓○錢は經濟學の認識主觀一般に外ならぬ。

○圓○錢を敢て貨幣と呼ぶならば貨幣は經濟的認識の主觀である。經濟的認識主觀は經濟的生命が體驗せられる所常に存在すると豫定せられなければならぬ當爲である。然らば經濟學に於ける價值判斷の絶對的標準は○圓○錢の貨幣でなければならぬ。同様にして勞働價值、效用價值の絶對的標準は○勞働と○效用とであり其は夫々生産者の認識の主觀、消費者的認識の主觀に外ならぬ。經濟學者が對象のみを問題とする限り價值判斷の絶對的標準は求め得ぬ。

○圓○錢が經濟的認識主觀であるとするならば○圓○錢の價格を有するものとは何ぞ。其は凡ての價格を有するものの爲に豫定せられなければならぬもの從て凡ての交換價值を有するものの爲に豫定せられなければならぬもの即ち經濟學者の所謂使用價值に外ならぬ。○圓○錢の價格を有するもの或は○圓○錢の交換價值を有するものとは使用價值の事である。

我々は○圓○錢の交換價值を認める從て凡ての使用價值は交換價值を有する從て使用價值は經濟學の正常なる研究對象であり得る。交換價值概念を擴張すれば使用價值も交換價值を有する但し○圓○錢の交換價值を有する。

使用價值を内含した交換價值は最早在來の意味に於ける經濟學の認識の對象一般でない、其は寧ろ價格一般或は命題的函數  $W = f(P)$  に於て表現せらる可きものである。經濟學の認識の對象は正確に擴張せられた。

認識とは主觀に依る客觀の認識である、對象一般が豫定せられる、主觀の對立が豫定せられる、對象の存在も主觀の豫定も生命の存在が豫定せられてこそ始めて有意義となる。然るに認識するものの立場からでは生命の存在其者は認識以上のもの認識の爲に豫定せらる可きもの超越論的なるものである。「我考ふ」が否定せられない以上生命の存在は疑ひ得ない。我々は生命の存在を現在として現在に於て直接且つ確實に經驗し得る。生命の衝動力は認識するものでもなければせられるものでもない純一無双なる生命其儘の實在である。

我々は  $x$ 、 $y$  の同質を可能ならしむるものを(一)物的なる富に(二)人間的なる價值に(三)觀念的なる經濟學の對象一般に求めた。實際的經濟學者の爲には與へられた對象の一般的存在以上に純粹同質的なるものは求め得られない又求める必要のないものとせられて居る。經濟哲學者の爲には對象一般は主觀一般に對立する當のものである、對立者が存する以上對象一般は最早哲學的意味に於ける純粹なる同質的媒介者でない、彼の爲には對象一般と主觀一般とを可能ならしむる經濟的生命の衝動力こそ  $x$ 、 $y$  を同質ならしむる純一無双なる同質的媒介者である。彼は言ふ。  $x$ 、 $y$  の同質を可能ならしむる純一無双なる同質的媒介者は經濟的生命の衝動力である。

經濟的生命の衝動力は經濟學の主觀一般と對象一般とを可能ならしむるものである。然らば其は經濟學的命題的函數  $W = f(P)$  と同格である。何者ば對象一般と主觀一般とを可能ならしむるもの



は二ツあり得ないからである。

x、yの同質を可能ならしむる一者を貨幣、他者を價值、統一者を價格一般とすれば經濟的生命の衝動力は第四者である。我々は此の第四者に於てx、yの同質を可能ならしむる純一無双なる且又超越論理的なる同質的媒介者を得た。經濟的生命の衝動力は、超越論理的なる、經濟的價值判斷の標準である。其處に於ては「コリン」であり得る、ロロロトトであり得る。

經濟價值説の體系

序説 交換價值

第一篇 貨幣

第二篇 價值

第三篇 價格

以上は經濟價值説に於ける三個の原始的觀念である。

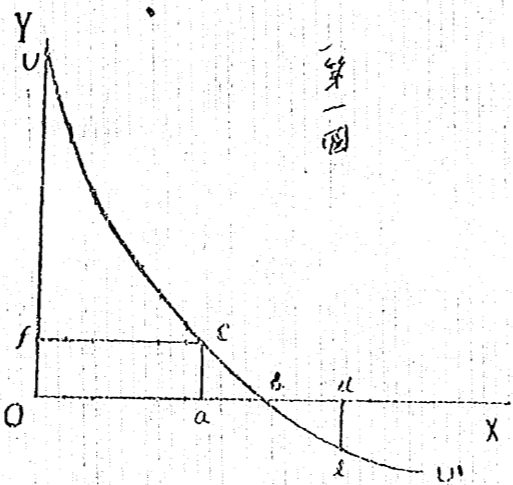
第四篇 經濟學的認識

第四篇は經濟價值説に於ける諸法則を含む

六

チャップマン氏著經濟學概説、三十三、四、五頁、限界效用のダイアグラムに依る説明。

右説明中に於ける Fig. 2 は第一圖の如くである。チャップマン氏は此の作圖を次の如く説明する。「我々は Fig. 2 に於ける UU' を『效用曲線』と呼ぶ。此曲線に關する商品の Oa 量が消費せられる時、



第一圖

該商品 Oa より得られる全部效用は OacU 又限界效用は其の高サ ac なる矩形である。若し供給増加の計量が極めて僅少なる量に於て爲される場合此矩形は極めて幅の狭いものであり得よう。約言すれば我々は單に次の如く言ひ得る、限界效用は ac である、こ。Ob が消費せられる場合、全部效用は ObU 又限界效用は零である。Oa が消費せられる場合、全部效用は OacU 又限界效用は de である。O に於て直角に交はる直線は座標軸と呼ばれる。曲線と OX との間に於ける様々な垂直的距離は其の縦座標、且つ又曲線と OY との間の水平的距離は其の横座標と呼ばれる。UU' 曲線が OY 上の一點より出發する事は、常に必ずしも可能でない、理論的にさへもそ

うである、何者は商品の最初の増加量の效用は無限であり得るからである」。

(I) 此の場合チャップマン氏が OX を以て財貨の量を計らんとするは明かである、然るに OY は何を計量すべきであるか。Oacf の矩形が極めて幅の狭きものであり得、結局に於て限界效用は ac である事を約言せる處から見れば OY は效用を計量すべきものの如く見ゆる。チ氏に従へば矩形 Oacf は限界效用である、今 cf、O の間を無限に狭めて行き、f が c に、O が a に重なつた場合、矩形 Oacf は一直線 ca となる。幾何學の考へ方に従へば矩形は縦の線と横の線とを必然に要求する、從て一直線 ca は矩形でない。故に限界效用が任意の矩形 Oacf に於て表明せらる可きものとすれば、

ca は限界效用を表明するものでない。然らば ca は何を意味するや、一般に UU' 曲線上の任意の點の縦座標は何を計量すべきものであるか。UU' 曲線上の諸點の諸横座標(此の場合財貨の量を計る)に對する諸縦座標は財貨の量に對する欲望を計量するものでなければならぬ。蓋し效用は欲望と欲望の對象たる財の存在とを條件として發生するものであるからである。效用曲線上の任意の一點を説明するに效用の縦座標を用ふるは科學上無意義である。效用曲線のみが問題であり且つ又效用曲線上の任意の一點の座標例へば c 點の座標を求めんとする場合

c 點の座標 (Oa の財貨、Of の欲望)

UU' 曲線を  $U \parallel X'$  で表はす。此場合 x を消費せられる財の量とすれば、y は其に對する欲望。x を欲望とすれば、y は其に對する消費せられる財の量である。效用一般に就て言ふ場合、欲望が變化すれば消費せられる財の量は變化する、反對の場合も眞である。效用一般に就ての説明の場合、消費せられる財の量が變化すれば效用は變化すると言ふは無意義である。何者ば效用一般の變化は效用曲線に於て既に豫定せられて居るからである。矩形 Oacf は  $Oaxac$  である。積は何を意味するや。ヨリ具體的ならざる立場にある二つの認識形式がヨリ具體的なる立場に創造的に綜合せられる事を意味する。今の場合

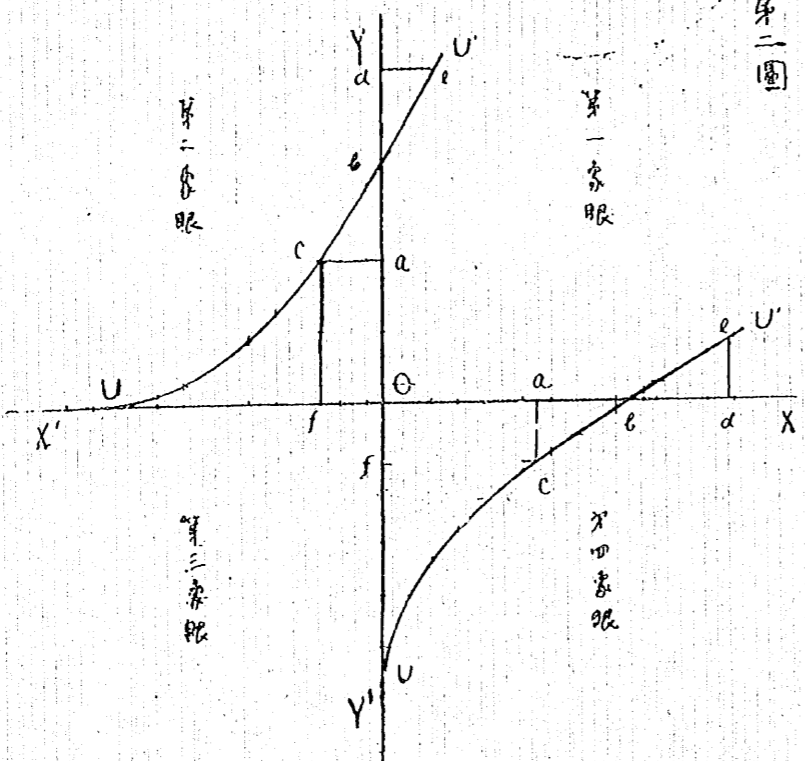
(消費せられる財) × (欲望) = 效用

(II) 以上述ぶる所に由り、OX は消費せられる財貨、OY は欲望を計量するものとすれば、OX は正の線、OY は負の線でなければならぬ。何者ば OX は正に消費せらる可く既に蓄積せられた財貨、積極的なる

存在を表はすに對し、OY は自身何等積極的なる貯へを有せず、然も尙消費せんとする欲望、消極的なる存在を表はすものであるからである。從て今解析幾何學の約束に従ひ、互に直角に交はる二つの直線  $XX'$ 、 $YY'$  を水平と垂直に引き、交點を原點、依て以て生ずる四つの直角の世界の第一象眼に於ける二つの座標軸 OX、OY を共に正の直線、第二象眼に於ける OY、OX' を夫々正、負の直線、第三象眼に於ける OX、OY' を共に負の直線、第四象眼に於ける OY、OX を夫々負、正の直線とすれば、

チャップマン氏の前記の效用曲線 UU' は第二象眼若しくは第四象眼に於て表現せらる可きものであらう。

(III) チャップマン氏の前掲書、百七十四頁を開けば「綜合需要及び綜合供給のダイアグラムに依る説明」なる見出しの下に次の如き一節を見出すであらう「上に論せられた二個の場合(其處に於ては諸事物が一定の比例に於て綜合的に需要せられ或は供給せられるのであるが)ダイアグラムに依て説明せられる。Fig. 10 を考へよ。



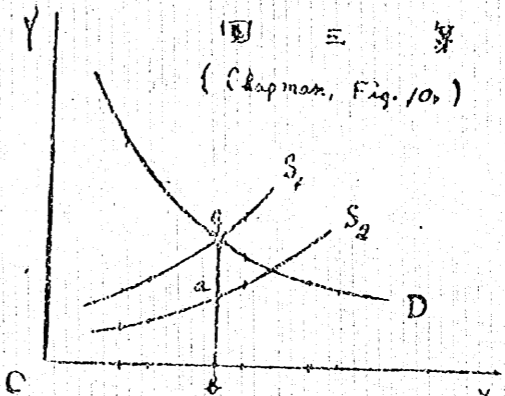
第二圖

第一象眼

第四象眼

第二象眼

第三象眼



貨幣はOYに從ふて計量せられ、ナイフの中身 Knifedblade 或はナイフの柄 Knifehandle 或は雙方を表はす諸單位はOXに從ふて計られる。Dは特定種類のナイフの諸中身と諸柄とに對する需要曲線である。S<sub>1</sub>はナイフの中身プラスナイフの柄より身に對する供給曲線である。S<sub>2</sub>はナイフの柄及びOb量の柄に對する供給價格である。然らば賣られるのはOb量の柄及びOb量の中身であり。中身の價格はab又柄の價格はcaであらう。此の場合OXが供給せられるナイフの量、OYが其に對する價格を計る事は明瞭である。然らばチャップマン氏は如何なる根據に基き、OYを以て效用と貨幣とを無差別に計量し得るのであらうか。チャップマン氏の第三圖は、需要曲線DD'に對して、座標軸OXは價格OYは購入せられる財貨の量。第四圖は限界效用の曲線P、c及びMに對して、OXは價格OYは效用或は満足の單位。第五圖は企業の曲線P、Qに對して、OXは企業の生産物OYは價格。第六圖は收益の曲線RR'、QQ'及びPP'に對して、OXは「労働及び資本の投下量」、OYは小麥の收穫。(第七圖第八圖以下是に類す。)を表明する。然らばチャップマン氏は如何なる根據に基き、同じ座標軸OX、OYを以て、貨幣、財、效用、收穫等を無差別に計量し得るのであらうか。或る者は言ふであらう。經濟學は數學の一部門ではない。經濟學に於て用ゐられるダイアグラムは幾何學の作圖と同じものでない、其は唯説明の便宜に使用せられるのみと。或は Keynes 氏の如く言ふであらう。「第一、經濟學は數

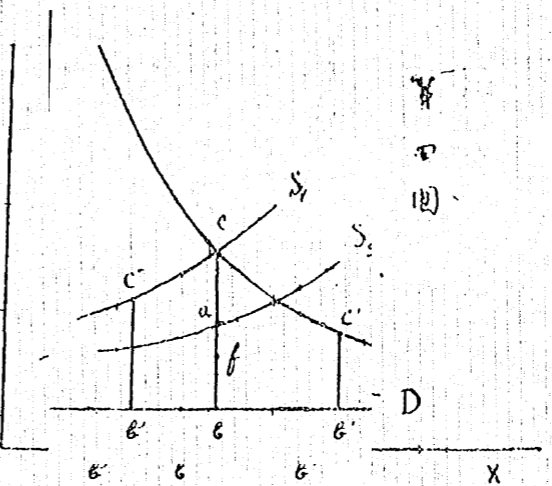
學的性質の諸概念を含む、其は數學的精神を以て分析せらるべきものである。第二、經濟學の或る部門あり、其部門に於ては記號法或は作圖法を實際に使用する事に依て有效なる助力が將來せられる。數學は、現在に到る迄の所、經濟的なる研究及び説明に於ける絶對に必須欠くべからざる道具である事を立證しなかつた。然し乍ら數學的なる諸觀念を經濟理論の中心問題に適用する事によつて發生する利益は、是を敢て揚言するも誇張に失するの慮はない」(Keynes, Scope and Method, p. 207. 我々は進まねばならぬ。

(IV) 今需要曲線と供給曲線とは相交はるものと前提する。此場合若しも需要曲線と供給曲線とが密でなかつたならば換言すれば連続して居なかつたならば、S<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>、Dの曲線は互に其の間隙に引かれたいかにも知れぬ。其場合交點は生ぜぬ。從て價格の點はない。經濟學者は需要曲線と供給曲線とが共に密なる事を證明せねばならぬ。證明は仲々困難である。

(V) D及びSの曲線は夫々需要及び供給の曲線である、然らばD或はS上の點は凡て需要或は供給の點である、然らば第三圖に於けるD、Sの交點cは需要及び供給の點である。交點は其儘では決して價格の點でない。cの縦座標cbが求められた時、始めて、交點cは此caの一點たる限りに於て價格の點となる。價格は需要曲線と供給曲線との交點にあるのではない。價格は其交點の縦座標である。

(VI) 今第三圖に於けるD曲線上、c以外の任意の點c'を取り、c'よりOXへ下せる垂線がOXと交はる點をb'とすれば

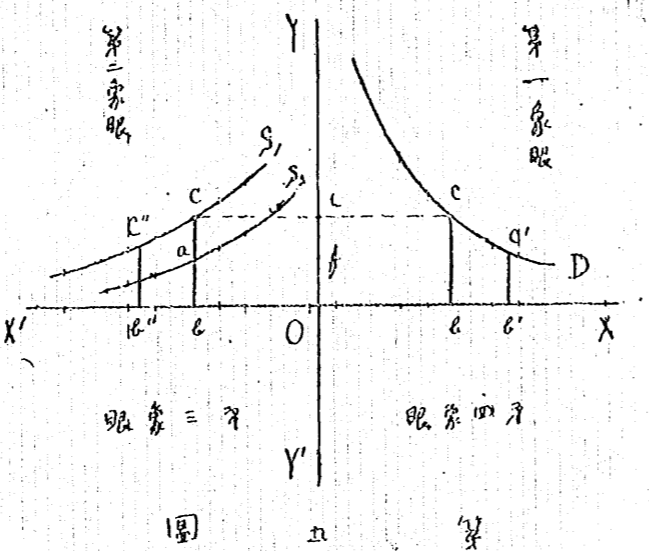
$S_1$  曲線上、 $c$  以外の任意の點  $c'$  を取り  $c'$  より  $OX$  下せる垂線が  $OX$  と交はる點を  $b'$  とすれば  $c'$  の座標(財貨の  $Ob'$ 、價格の  $c'b'$ )



$S_1$  は供給曲線なる故、 $c'$  の量を提供せられる財の量を以て説明するは無意義である。何者ば  $S_1$  は既に其を含んで居るからである。供給に對するものは需要である。 $c'$  の横座標は財の量でなくて、財に對する欲望を計量せねばならぬ。欲望の計量は負の直線に依て爲される故  $c'$  の横座標  $Ob'$  は第二象眼になればならぬ。價格は需要と供給とに共通に  $OY$  に沿ふて計られるとすれば、第四圖の需要曲線と供給曲線とは、夫々、第一象眼及び第二象眼に表現せらる可きであらう。

第五圖参照

今ナイフの需要と供給とはは變化なく、貨幣價值の側に變化あり、價格が  $cb$  から  $fb$  (或は  $fo$ ) へ下つたとする。此場合  $f$  は需要曲線、供給曲線の何れの上にもない。従て  $D$ 、 $S_1$  の交點にない。此事は第四圖に於ては不合理に見ゆるが第五圖に於ては何等の不都合も起さない。更にナイフの需要が變化して、 $c$  が例へば  $c'$  に變化するならば、其に従て供給も變化する。然るに凡ての變化する供給の點は  $S_1$  の上に豫定せられて居る。今變化した供給の點を例へば  $c'$  とすれば、價格へ正しくは價格の點  $c'$  は需要と供給との交點にない、



此事は第四圖に於ては不合理に見ゆるが、第五圖に於ては何等の不都合も起らない。

(VII)  $D$  及び  $S$  は其のある可き象眼を異にする、従て決して相交はる事はない。 $D$  及び  $S$  曲線上の凡ての點は價格の  $OY$  線上に投影せられる。我々は言ふ。需要曲線と供給曲線とは決して相交はる事はない。價格は點でない。而して價格の點は需要曲線と供給曲線との交點にはない。

(VII) 需要曲線上の任意の一點  $c'$ 、供給曲線の上の任意の一點  $c$  の座標を求めると言ふ事は、需要、供給の世界の一事實をば夫々の世界の限界を劃する(供給の世界、と、價格の世界)、また(需要の世界、と、價格の世界)へ投影してみる事である。

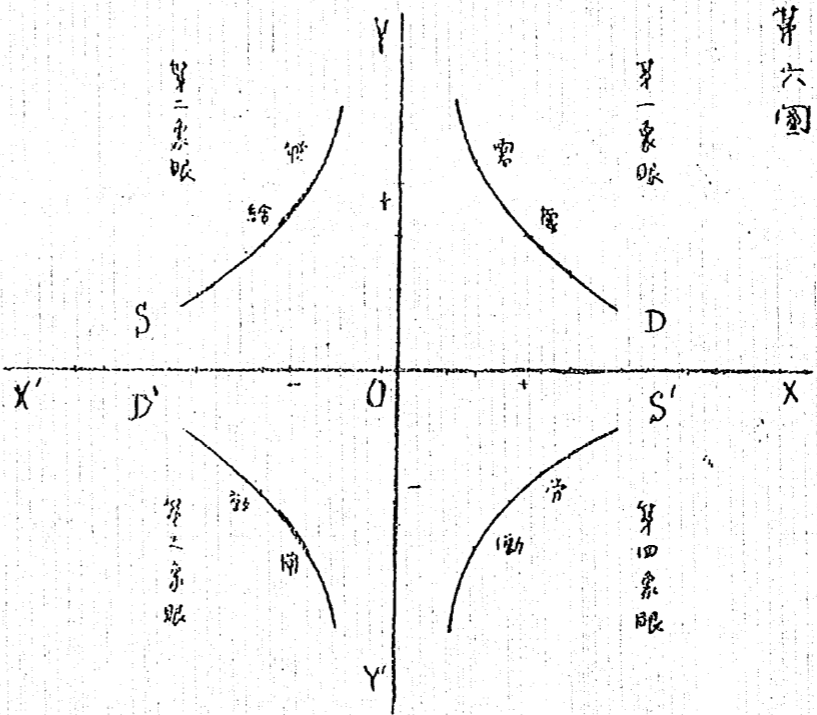
斯くて我々は

$c'$  の座標を  $(Ob')$  の供給、 $c'b'$  の價格)  
 $c''$  の座標を  $(Ob'')$  の需要、 $c''b''$  の價格)  
 に求めるのである。

(IX) 需要曲線は第一象眼に、供給曲線は第二象眼に表はせ。然らば  $OY$  は兩者に共通に價格を表はし、 $OX$  は提供せられる財の量、 $OY'$  は提供せられた財に對する需要を計る。

(X) 第一象眼と第二象眼、第二象眼と第四象眼とは夫々對稱である。從て第六圖のD曲線、S曲線は、

第六圖

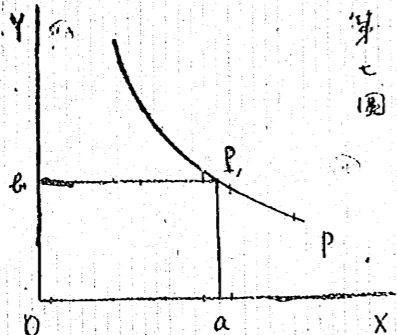


D'曲線、S'曲線に移されるであらう、D及びSは、經濟學の世界其者を基として考へられた場合の需要曲線と供給曲線とであるが、D'とS'とは、人間的價值的認識の世界の一部としての經濟學の世界の、需要曲線と供給曲線とである。其意味は、DとSとが自然的非價值的認識の事實であるに對して、D'とS'とは人間的價值的認識の事實であると言ふ事である。D、Sの曲線に就ては、價格は正、供給も正、需要は負であるが、D'、S'曲線の場合、價格は負、供給も負、需要は正である。何者ばD'、S'は人間的價值的認識の事實なるの故を以て一般に負に着色せられるからである、正の負は負、負の負は正であるからである。人間的價值的認識の世界を經濟學の世界に見出すならば、其は經濟價值説の世界である。然らば第三象眼のD'は需要曲線でなくて效用價値の曲線である。第四象眼のS'は供給曲線でなくて勞働價値の曲線である。OX'は勞働、OXは效用、OY'は同じく價格を計量する。效用曲線、勞働曲線上の任意の點は凡て、價格の直線OY'の上に投影せられる。我々は次の如く言ふ。

第一及び第二象眼は需要と供給と價格の自然的實證的世界。第三及び第四象眼は效用と勞働と價格との價值的觀念の世界。を表現する。價格は凡ての場合に共通する要素である。需要供給價格論と效用勞働價格論(或は效用勞働及交換價值論)との本質的關係は第六圖に依て正確に、幾何學的に表明し得るであらう。經濟學の諸問題が價格を中心とする事も正確に理解せられ得よう。

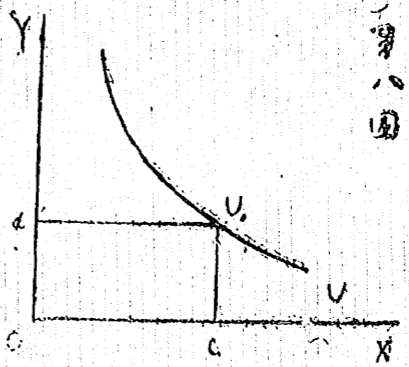
(XI) 第七第八第九の各圖に於ける曲線を夫々、價格の曲線P、效用の曲線U、勞働の曲線Lとすれば、YO'L圈内にある三つの世界は夫々、價格の世界、效用の世界、勞働の世界である。價格は勞働と效用とを因數とする。價格は需要と供給とに依て定まる。今OXを勞働の軸、OYを效用の軸、P<sub>1</sub>をP曲線上の任意の點とすればP<sub>1</sub>の座標(Oaの勞働、Obの效用)OXを供給の軸、OYを需要の軸とすればP<sub>1</sub>(Oa供給、Ob需要)但しa、bはP<sub>1</sub>よりの垂線が夫々、OX、OYと交はる點である。勞働と供給とは共に正、效用と需要とは共に負とすれば、價格の曲線Pは第二象眼若しくは第四象眼に屬するものであらう。

第七圖



但しa、bはP<sub>1</sub>よりの垂線が夫々、OX、OYと交はる點である。勞働と供給とは共に正、效用と需要とは共に負とすれば、價格の曲線Pは第二象眼若しくは第四象眼に屬するものであらう。

第八圖

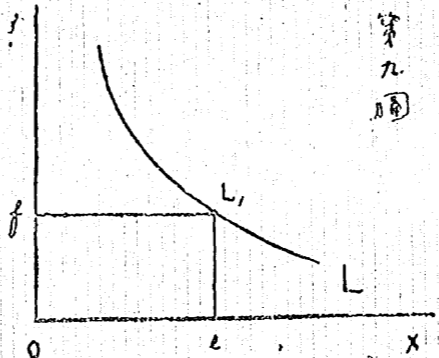


UはOc、Odの、正、負の性質如何に依て、第一第二第三及び第四象眼に屬す。

U<sub>1</sub>(Oc對象、Od欲望)

労働は自然的要素(土地或は人口)と人間的要素(資本或は企業)とを因数とする。L<sub>1</sub>(Oe自然的要素、Of人的要素) L<sub>1</sub>はOe、Ofの、正、負の性質如何に依て、第一、第二、第三、第四、象眼に屬す。

第九圖

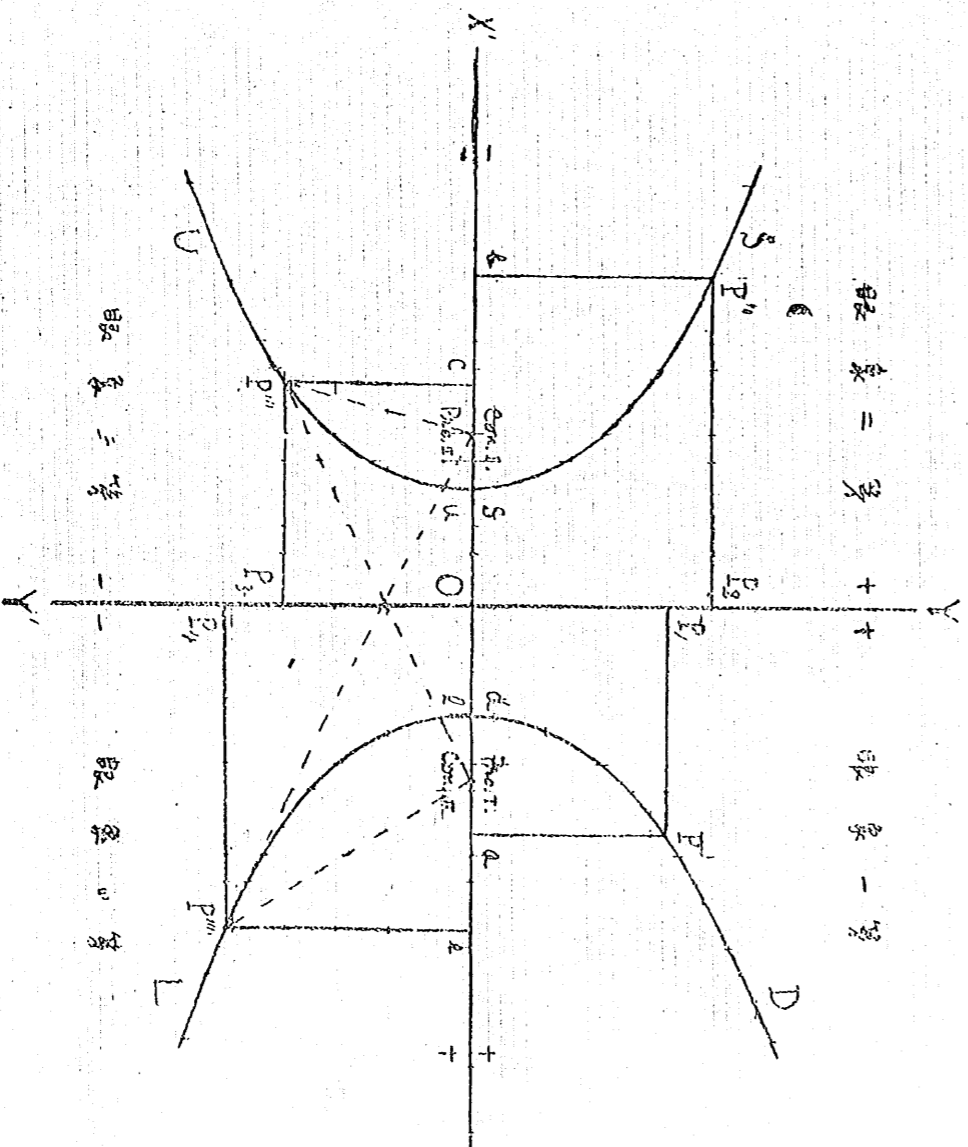


需要曲線、供給曲線も同様にして考へられる。第七圖は座標軸に價格を含まず、第八、第九圖は價格を全然含まざるに注意す可きである。

(XII) (1) 價格は需要と供給とに依て定まる。經濟的なる需要は一般的需要が或る點迄増大して經濟的利益の發生を可能ならしむる時始めて存在する。供給の場合も此と同じく、供給する事に依て經濟的利益を發生せしめ得る時のみ發生する。從て需要曲線と供給曲線とは座標軸の原點に於て交はる事はない。常に利潤を(一般的には經濟的利益を)挟んで相對峙する。利潤は一般に價格の増大と共に増大する從て需要曲線と供給曲線との距りは價格の増大と共に増大する。

(2) 價格は労働と效用とに依て定まる。此場合は(1)と相似である。

第十圖



(3) 價格は需要と供給とに依て定まる、或は價格は勞働と效用とに依て定まる。價格は一般に  $xy = a$  此は双曲線の方程式である。

(4) 經濟學の認識の對象一般は價格一般である、凡ての認識の對象は價格に投影せられる。

(5) 第一、第二象限は自然的非價值的認識の世界、第三、第四象限は人間的價值的認識の世界、前者に於て OY の價格、OX の供給は正、OX' の需要は負。後者の場合 OY' の價格、OX の效用は正、OX' の勞働は負。價格は YOY'。

(6) 需要と效用、供給と勞働とは對稱。第一第二象限一般と第三第四象限一般とも對稱。

(7) 需要と效用の曲線、供給と勞働の曲線は夫々消費者文化價值及び生産者文化價值に關す。

以上七個の條件を具備するダイアグラムを作れば右の如くてあらう。

但し圖中 Dd、Ss、Uu、Ll は夫々需要曲線、供給曲線、效用の線及び勞働の線を表明する。二個の點 Pro.  $w_j$  Con. とは夫々生産者文化價值、消費者文化價值の點である。双曲線 DL、SU の二つの焦點である。(Pro. I)  $\times$  (Pro. II) (Con. I)  $\times$  (Con. II) とは夫々對稱且つ O は原點である。YY' は價格、

OX は第一象限に於ては財の量、第四象限に於ては效用。OX' は第二象限に於ては需要、第三象限に於ては勞働を計る。

OY 上任意の一點 P<sub>1</sub> を取れ、然らば P<sub>1</sub>O は一定の價格である、一定の價格は我々が日常現實の取引に於て直接且つ確實に經驗し得るものである。P<sub>1</sub> を通り OX に平行なる直線が Dd と交はる點を P' とせよ、然らば需要曲線 Dd の上に寫された價格の姿は曲線分 Pd であらう。逆に Pd の需要が存する時の價格は

P<sub>1</sub>O。價格 P<sub>1</sub>O、需要 Pd なる場合に提供せられる財貨の量は P<sub>1</sub>P'。即ち Oa である。

P' の座標 (價格の P<sub>1</sub>O、財の Oa) …………… (A)

OY' 上任意の一點を P<sub>2</sub> とせよ、P<sub>2</sub> を通り OX' に平行なる直線が Uu と交はる點を P'''、P<sub>2</sub>O/P'''c とすれば、價格 P<sub>2</sub>O なる場合、認められたる效用は曲線分 P'''<sub>u</sub>、費された勞働は P'''<sub>u</sub> 即ち Oc である。

P''' の座標 (價格の P<sub>2</sub>O、勞働の Oc) …………… (C)

同様にして第二象限に P<sub>2</sub>' 及び b。第四象限に P<sub>2</sub>'' 及び e を作れば

P'' の座標 (價格の P<sub>2</sub>O、需要の Ob) …………… (B)

價格 P<sub>2</sub>O なる場合、供給は曲線分 P''<sub>s</sub>、需要は Ob である。

P'' の座標 (價格の P<sub>2</sub>O、效用の Oe) …………… (D)

價格 P<sub>2</sub>O なる場合、費された勞働は曲線分 P'''<sub>l</sub>、認められた效用は Oe である。

(XIII) 任意の富に對して P 圓の價格が成立したとする。消費者が是に對して認めた效用を x、消費者餘剰を a とすれば

$$(x - P) = a \dots\dots\dots (1)$$

其の同じ富に對して費された勞働を y、其の富の交換によつて發生する經濟的利益を a' とすれば

$$(y + a) = P \dots\dots\dots (2)$$

(1)より  $x-a=P$ .....(3)

(2)より  $x=a$

$y+a'=x-a \therefore x-y=a+a'$ .....(4)

(4)を一定時一定點に於ける經濟的利益の總體とし且つ(4)の兩邊を資本全額で除して

$\frac{x-y}{\text{資本全額}} = \frac{a+a'}{\text{資本全額}}$

$\frac{x}{\text{資本全額}} - \frac{y}{\text{資本全額}} = \frac{a+a'}{\text{資本全額}} = \text{平均利潤率}$

平均利潤率は一定時一定點に於て一定である。従て、一般的に

(Con. I.)  $P''' = a+a'$  (一定)

(Con. II.)  $P''' = a+a'$  (一定)

従てLとUとは双曲線である、従てDLとSUとは双曲線である。二定點、生産者文化價值の點と消費者文化價值の點への距離の差が一定なる點の軌跡である。(XII)の(3)参照。

富きは價格を有するものの事であり、富の現象は凡て双曲線に表はされ、双曲線は凡てYY'軸即ち價格へ投影せられる。經濟現象は凡て價格に換算せられる。

XX'とYY'との交點はOrisia原點である。其は價格にも、需要にも供給にも、效用にも労働にも、其他凡ての經濟現象に共通する點である。其は經濟學の認識主觀の點に外ならぬ。價值的に言へば經濟的文化價值である。價格に直せば〇圓〇錢の價格である。〇圓〇錢を敢て貨幣と呼ぶならば其は貨幣に外ならぬ。

生産者文化價值の點と消費者文化價值の點とは、双曲線の焦點である。生産と消費とが經濟行為である限りe+e'は常に存在する。一つの價格の成立する點から、消費者文化價值、生産者文化價值、の點への距離の差は、一定時一定點に於て、常に一定である。

斯くて貨幣、價格、需要供給、效用労働其他自般の經濟現象は幾何學的に正確に表現し得る。マルクスの價值説。等しき價值の交換、直角の假設、ユークリッド的な考へ方。マルクスの價格説、價值以上に或は以下に賣られる。鈍角或は銳角の假説。非ユークリッド的な考へ方。ユークリッドを非ユークリッドの一つの特別の場合と考へるならば、マルクスの價值説と價值説とは幾何學的に數學的に矛盾なく説明し得られる。正確に説明し得られる。